別記様式第6

論 文 審 査 の 要 旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士（　文学　） Ph.D.	氏 名 (Candidate Name)	井野崎　千代子
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当		

論　文　題　目 (Title of Dissertation)
Emerging *Conscience*: Its Circumstances in *Ancrene Wisse*

論文審査担当者 (The Dissertation Committee)

主　　査 (Name of the Committee Chair)	教授	大野　英志
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	今林　修
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	吉中　孝志
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	和田　葉子（関西大学）

〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)

本論文は、13世紀イングランドで隠遁修道女たちの指南書として書かれたとされる*Ancrene Wisse* (*AW*)に初出する*conscience*という語に着目し、全写本の比較により類義語（*conscience*-words）との関係を明らかにしながら、この語がどのように英語として定着していったのかを明らかにした論考である。論文は序章、本論10章、結論からなる。

序章は、本論文の調査方法を説明し、さらに*AW*以前の時代の*conscience*-wordsを概観する。

第１章は、現存最古のCleopatra (C)写本における第２書記による第１書記テクストへの加筆修正を考察し、それが第２書記がより広い読者を対象としていることの一要因であると指摘する。

第２章は、*AW*の第１章ラテン語祈祷文を写本間で比較し、読者の性差や特徴に応じたテクストの世俗化を明らかにする。本論第１、２章により写本比較の有用性を確認する。

第３章は、*AW*研究の中心となっているCorpus (A)写本を基として*conscience*と類義語*inwit*の全写本間照合を行い、初期写本では本来語*þonc*や*þoug*ʒ*th*が使われ、後の写本やフランス語版に*conscience*の大幅な使用拡張が見られることを指摘する。

第４章は、A写本で借入語*conscience*導入に用いられる説明的並置語*þet is*について分析する。そして、*AW*では*þet is*を用いて先行語を説明する手法が顕著であり、これは元々の読者（隠遁生活を希望する女性平信徒）に馴染みのない語の内容を解説するという本書の姿勢を示すと指摘する。また*þet is*と共起するプンクトゥス(.)の現れ方が先行語の語源により異なることを指摘する。13世紀における*þet is*の調査はこれまでなされていない。

第５章は、C写本の第１書記テクストに対する第２書記の修正を精査する。これにより、①第２書記による*wit*から*inwit*への修正を先行研究のように「誤りを正す修正」と見るのではなく、第１書記テクストのままでも意味をなすこと、②第２書記は本来語を本来語で修正（theological vernacular revision）していること、③C写本に見られる*conscience*の英語注釈でもある*þonc*は写本全体では聖なることを瞑想する際にも、世俗の物事を考える際にも使われている語であることを指摘する。

第６章は、A写本を基とした比較では見えない、C写本にのみ確認できる*conscience*-wordsを検証する。この写本では*conscience*と*consense*との混同が見られることから、この語の扱いに混乱が見られることを指摘する。

第７章は、C写本第４書記による*conscience*-wordsへの修正を検証する。第２書記と対照的に、第４書記の修正は*conscience*ではなく本来語*wit*の意味を明確にするためであることを示す。

第８章は、C写本において、新造語*inwit*と綴りが似て、出現する文脈も共通する前置詞・副詞

*inwid*を分析し、*inwid*が心の重層性を表す役割を持っており、*inwit*の形成に影響を与えた可能性も否定できないことを指摘する。

第９章は、C写本において、*conscience*と同義の可能性のある語*cor*、*witnesse*、*judge*、*rule*の意味を検証し、これらには*conscience*と同じ機能を有する箇所があることを示す。また、*AW*には*conscience*のような神学的用語が複数現れるにも関わらず、これらについての神学的説明は展開されず、*AW*が隠遁者の生活の手引書であると同時にlay theologyの書とも言えると指摘する。

第10章は、*AW*と同時期に同じ聴衆・読者を対象に書かれたとされるAncrene Wisse Groupの９作品における*conscience* wordsを調査する。これらの作品には散文*AW*にはあまり見られない、読み聞かせ文学の特徴である頭韻やワードペアが数多く見られ、*wit*が多義的に使われていることを明らかにする。そして、*wit*の広範囲性が造語*inwit*の誕生に繋がった一要因と考えられると述べる。

結論として、①*AW*諸写本における*conscience*の出現頻度の変化、②説明的並置語の用法から見える*conscience*の認識、③先行研究で「正しい」と言われたテクスト修正への反論、④書記の修正方針、⑤英語起源の類義語の重要性、を明らかにしたとまとめている。

調査が広範囲にわたりすぎたきらいがあり、論文としては煩雑な論理構成に課題を残すが、権威的な辞書であってもこれまで詳細に説明がされてこなかった借入語の初期段階での扱いを、諸写本の比較また同時期の文献との比較という手法によって、対象読者を意識した書記の態度を踏まえながら本論文が究明したことは、*AW*研究や語彙研究の分野に大いに寄与する。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考　要旨は，1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)